算命学中庸

【初年】４１回目

４１回目の授業はこのページからです。

授業科目　　〖十二大従星力学〗②

❒ 十二大従星力学（じゅうにだいじゅうせいりきがく）②回目

✏ 天印星（てんいんせい）です。

天印星 ― 赤子（あかご）

胎児のつぎの時代は〖天印星〗です。

赤子の時代・赤ん坊の時代に星です。

赤ちゃんのすがたを想い浮かべるとわかりやすいです。
赤ちゃんがいると、そのまわりの人たちは、どのように感じ、どのように想うのでしょう。
“赤ん坊の特徴はなに……”と考えてください。
赤ん坊は〔かわいい〕〔愛(あい)らしい〕といえますよね。

赤ちゃん ― かわいい

赤ん坊にしか見られない、愛らしい姿をそなえているはずです。
では……なんで赤ちゃんは可愛いのでしょう？
なんで愛らしくみえるのでしょう？
それは無垢で天真爛漫(てんしんらんまん)だからですよね。
赤ん坊に下心（わるだくみ）はありません。

赤ん坊がニコッと笑うと「かわいい赤ちゃん」そうおもうのは“ほんわりとしたあたたかさ”を感じるからではありませんか？
悪巧(わるだく)み、下心(したごころ)がない、無我の笑顔ゆえに可愛いです。

お偉(えら)いさんの愛想(あいそ)笑いのような、ニコッとはしないです。
相手がどのような人であろうと、赤ちゃんが楽しければ口を大きくあけて、満面の笑みをたたえ、きゃっきゃっと、喜ばしい声を発します。
いやなこと、嫌(きら)いなことがあれば、泣きだします。
それは無心・無欲でおこなわれますから、可愛くみえるはずです。

赤ちゃんは 無我・無心

俗念(ぞくねん)や邪心にまったくとらわれない無我・無心の存在というのが、赤ん坊の特徴といえます。
無心の存在を言い換えれば、天真爛漫(てんしんらんまん)とか、無邪気(むじゃき)とか、あどけない、ともいえます。
赤ん坊はまだ物心(ものごころ)がついていません。

参考・無垢(むく)〔心をけがす垢(あか)、煩悩(ぼんのう)がないさま〕

参考・無我(むが)〔我(われ)というとらわれを離れ無心なこと。私心がないこと〕

参考・無心〔俗念(ぞくねん)や邪心(じゃしん)にまったくとらわれないさま〕

参考・物心〔人の気持ち、世態(せたい)、人間関係などわかりはじめる〕

参考・天真爛漫〔うわべをかざることが少しもなく、ありのまま、心におもうままであること。無邪気なさま〕

参考・無邪気〔邪(よこしま)なおもい、考えがないこと〕

参考・思慮分別〔善悪・損得を判断する。正邪(せいじゃ)をわきまえること〕

自分で意識して“なにかをやる”という年齢にたっしていませんから、思慮分別(しりょふんべつ)がないのです。
それゆえに、何事についても、無心の心持(こころも)ちでいます。

ライオン、虎(とら)、熊(くま)とかの猛獣も、赤ん坊の時代は可愛く見えますよね。
このことは人間でも、ほかの動物でもおなじで、幼いときは無心ですから、なにかを意識するとか、欲得や邪念をもっていません。
〔なにがあって〕〔なにがないのか〕を知ろうともしない純粋(じゅんすい)なすがたです。
損得などの汚れがない、清らかさが身の安全につながります。

赤ん坊の無心でいる清らかさが保身につながる

赤ちゃんの無邪気(むじゃき)なようす、あどけないすがたを見ると、親はもちろんのこと、まわりの大人、そして子供さえも赤ん坊の面倒を看(み)たくなるわけです。

赤ん坊を取り巻くまわりの人は、笑う顔が見たい、あやして気を惹(ひ)きたい、痛いところがあれば取り除いてあげたい、泣いている赤ん坊の心のおもいを汲み取って……泣き止(や)ましてあげたい、そのように心がうごかされるわけです。

赤ちゃんの無心の姿に〔かけがえのない姿(すがた)を大切にしたい〕と想(おも)う母性本能的な気持ちが湧(わ)いてくるわけです。

赤ん坊がわかってやっているのではない、邪気のない姿でいることが、自分の身をまもることにつながっているのです。

それゆえに、天印星をもっている人は、無心でいることが保身(ほしん)になります。

「無心」……大人の場合は「無欲」といえるでしょう。

無心でいるすがたは保身につながり

↓

無欲でいるとまわりから好かれる

「邪気のない無欲でいることは保身につながります」というふうに考えると、わかりやすいとおもいます。
その姿はまわりから好感をもたれます。

天印星をもつ人は、無心でいると、まわりから好かれるようになり、大切にされたり、困ったときにはまわりから助けてもらえたりして、保身につながっていきます。
言い換えれば……天印星をもつ人の欲が強いと、まわりから嫌われます。
この『欲』は物事全般にいえます。

赤ん坊は〔好かれよう〕とおもっていません。ありのままのすがたです。邪念なく、まわりに何も求めずに笑顔をみせるので、よけいに可愛いのです。
天印星をもつ人は、それとおなじ質をそなえています。
そのことを基点にして考えてください。

参考・無欲〔欲張らない。むさぼりのないさま。人を押しのけてまで求める欲がないこと。欲深く物をほしがらないこと〕

参考・欲得（よくとく）〔欲深く物をほしがること〕

参考・意識〔自分がいま何をしているのか、どういう状況におかれているのか、はっきりわかる心の状態〕

参考・感化（かんか）〔強制することなく、自然に人に影響を与える〕

いまの説明にも出てきましたが、天印星はまわりを感化するちからがある星です。

天印星には感化力がある

家に赤ちゃんがいるだけで、その家のなかの雰囲気が変わります。
いままでは、大人たちが醸（かも）し出していた雰囲気だったのに、赤ん坊を誰かが連れてくると、まるで陽だまりのようなおおらかな気持ちになったりします。
天印星はまわりの人の心持（こころも）ちをなごませる……そのようなチカラをもっています。

その場の雰囲気を明るく、やわらかくするちからがある

参考・心持ち〔物事を見聞し、何かを感じとった心の状態〕

〔たとえば〕融通のきかない堅物(かたぶつ)のおじいさんでも、自分の孫とか、他人の赤ちゃんでも来ると、「〇〇ちゃんよくきたねぇ」とか「イナイ、イナイバー」をやって見せたり、普段(ふだん)そんなことをしない人が、するようになったりします。

そこにいるだけで、こころをなごませたり、元気づけたり、こころにぽっと灯(あか)りをともす作用をもっているのが赤ん坊です。

人を元気づけて、おだやかな気持ちにさせる

そういうチカラのある星が天印星です。

赤ちゃんの笑顔には、ほんとうに癒やされます。

なにかほっとさせられます。

天印星をもつ人は、邪気のない、下心がない、無心の心持ちでいるときには、人を感化(かんか)するチカラを発揮できる人です。ただし「無心」が条件です。

まわりの人に〔善(よ)い人だとおもわれたい〕とか、〔自分に注意を向けたい〕とか、そのような欲望や下心があると、裏目

に出てしまうのです。

参考・感化（かんか）〔人に影響を与えて心を変えさせること〕

参考・善良（ぜんりょう）〔特に、性質が正直で温順・素直なこと〕〕

☞ 赤ん坊は受（う）け身（み）のすがたです。

受け身の星

天印星は“受け身の星”ともよばれます。
赤ん坊は自分から食べ物を取りにいって、食べることもできません。着替えることもできないのです。
他（ほか）からのはたらきかけを受ける立場です。
お腹が空（す）けば泣きますが、泣きながら親がミルクをくれるのを待っていなければならない受け身です。
これは母親なり、誰かに面倒を看てもらっている姿です。
自分では何もできないので、世話をしてくれるのを待つわけです。
このような受け身の姿は、運勢のうえでもおなじだと考えまして、『待ちの運』といいます。
無心が保身につながる特質をそなえています。

受け身の星

↓

待ちの運

天印星をもっている人は『待ちの運』です。
赤ん坊は自分では、なにもできないので、待っていなくてはいけない、待っていると、まわりの大人が面倒を看てくれます。
天印星をもつ人は、待ちの質が運勢に備わっていますから、受け身でまっていたほうが、運勢がひらけるという特徴があります。

受け身で待っていたほうが運勢はひらける

自分から進んで、なにかを起こそうとして動くよりも、待っていたほうが、運が向いてくるわけです。
そういう運勢の持ち主といえます。

〔たとえば〕仕事をやろうとおもったら、自分から進んであちこち探し歩いて〔こういう仕事に就きたい〕と、

思って動くと、結果的にいい仕事が見つからないのです。それよりも受け身で待ったほうが、いい仕事がでてくるという運勢です。

✏ 結婚もおなじです。
〔よい相手はいないだろうか〕と自分でさがし動くとか、この人がいいとおもったら、自分から積極的に働きかけて、相手の気を引こうとすると、かえって相手から嫌われるということが起こります。
それよりも、天印星をもつ人は受け身で待っていると、自然に自分に合う人（レベルは存在します）が現れるとか、相手のほうから近づいてくるようになります。
結果的に、運が向いてくるわけです。

しかし「待っていたら結婚できなかった」そうなるかもしれませんよ。それは無心で待っていなかったからです。『待っていればよい結果がまわって来るから、待っていよう』という思いは、受け身ではないのです。
期待を抱(いだ)かないで「無我・無心」でなくてはいけないのです。これはとても難しいことですね。

天印星をもつ人は「無我・無心」ですよ。と、算命学で学んでも、天印星の〔良い面〕〔悪い面〕を、あっちに出し、こっちに出し、という生き方をする場合が多いです。

「不断（ふだん）の練習がものをいう」のです。

いつも……なるべく無欲の状態でいることです。

無欲の状態でいる自分に、相手から〔なにかを求められたとしたら〕それも無心でやるのです。

〔たとえば〕仕事でも、会社から求められたことを一生懸命やると、それは無欲で受け身です。

そのほうが出世するようになります。

自分から出世しようとか、手柄を立てようとして動くと、おもいどおりに物事が進まないで失敗します。

たとえそれがうまくいっても、まわりから妬（ねた）まれるとか、足を引っ張られる状況になってきます。

なにごとにも、欲得なく「まわりから求められたことは、一生懸命やる」つねにそういう心構えで、物事に対処していると、結果的に伸びて行きます。

赤ちゃんの姿を想い浮かべて、つねに気持ちをととのえる究極（きゅうきょく）を求められます。　ほんとうに難しい星です。

参考・一生懸命（いっしょうけんめい）〔命がけで事にあたること。いちずな気持ちなること〕

参考・不断（ふだん）〔絶え間なく続くこと〕

参考・究極（きゅうきょく）〔ものごとをはてまできわめること〕

☞ もう１つ天印星の大きな特徴があります。

養子の星

天印星は「養子の星」と呼ばれています。
人間の一生のなかで、養子に行くのに最適（さいてき）な年頃（としごろ）があるとすれば、この時代が当（あ）て嵌（は）まります。

物心（ものごころ）もついていない時代ですから、どの家に養子に出されても、本人は悲しくないわけです。
赤ん坊なので、どのような親のところへ養子に行っても、その親を自分の親だとおもって育つことができます。

参考・物心〔人情・世の中のありさま・状態を理解する心〕

〔たとえば〕ご承知のように、吉田茂は外交官・内閣総理大臣を歴任した人物ですが、生まれてまもなく養子にもらわれます。

吉田茂の実父は〔竹内綱〕で、子供のいない〔吉田健三・士子〕夫妻のところへ、生まれて数日後にもらわれて行きます。

吉田茂　1946(s21)年５月・内閣総理大臣に就任。

養父の吉田健三は、日本初の新聞・東京日日新聞〔現・毎日新聞〕の創刊に参画しています。

吉田健三（福井藩士）は、鎖国時代に英国船に密航して、英国へ渡っていますから、新聞の必要性を熟知していました。

実父・竹内綱の長男（竹内明太郎）は現小松製作所を創設。

✽ 吉田茂　1978(M11)-9-22

	癸	辛	戊		牽牛星	天恍星	6 壬戌
辰	卯	酉	寅	鳳閣星	龍高星	調舒星	16 癸亥
巳			戊	天貴星	鳳閣星	天報星	26 甲子
			丙				36 乙丑
	卯	辛	甲				46 丙寅
							56 丁卯
							66 戊辰
							76 己巳
							86 庚午

この宿命のなかに実母はいません。育ての母（偏母）がいます。

大人になっても、養子にだされた本人は覚えていません。天印星は赤ん坊の時代ですから、どのような親のところへ養子に行っても、自分の親だと信じて育つことができます。養子先の人間に成りきれます。

しかし、小学生くらいの年齢になって、いきなり養子に行くような状況になるとすれば、実の親をわかっていますから、養子先の家に慣れ親しむのは難しいのです。
また、当たり前ですが、天報星（胎児の時代）に養子に行くことは不可能なわけです。

「三つ子の魂百まで」といわれますように、天貴星の時代に入ってしまうと、この時代に起こった事象は大人になっても忘れません。
そうしますと、天印星は一生のなかでもっとも養子に適する時代ですから、養子に行けば行ったで、よい養子になれるのです。

天印星は養子の星ですが、算命学的には“養子運”があるという意味になります。

養子の星

↓

養子運がある

『天印星をもつ人は、養子運がありますからね……』
養子に関する占いのときに、このような言い方をします。

『養子運がある』それはどういう意味なのかといえば、

養子または養子的になりやすい質をもつ

天印星をもつ人が、必ずしも、他家の養子になるわけではありません。そうなるとは決まっていません。
天印星をもつ人は、養子に行かなくても、子的になりやすいのです。
〔たとえば〕天印星をもつ夫の場合でいえば……妻の実家との関わりが深くなって、妻の親の面倒を看るようになるとか……本当の養子ではないのですが、養子的な部分をだすようになります。〔たとえば〕妻の家の姓に名字（みょうじ）を役所に、登録して変えたとか、確かな養子ではなくても、そのような質をだすこともあります。

☞ 占いのうえでは、つぎのところが大切です。

天印星は養子運があります。

養子運のある人物を、実際に養子にもらうと、その養子が来た家はしっかりと安定してゆくようになります。

逆に、養子運のない人を養子にもらうと、その家の家運が衰退していくのです。

養子運のない人を養子にもらうと家運が衰える

養子運をもたない人を養子にもらうと、その家は家業が衰えたり、子孫によい子供が生まれなくなったり、さまざまな出方がありますが、いずれにしても家運は崩(くず)れていくようになります。

子供養子をもらう・婿養子をもらう、どちらも入ります。

といいますのは、天印星は養子運をもっていますけど、

養子運のある星は、天印星のほかにもあります。

天印星だけが養子運をもっているとはいえません。

宿命を観て、天印星がない「うちの婿養子は天印星がないからダメよね」と、そこだけでは決められません。

天印星のほかにも『養子運』をもつ宿命があります。それにつきましては、もう少し先になってからでてきます。

『養子運』の代表といえる星が天印星なのです。

その天印星は〔跡継ぎ・後継ぎ〕には向かない星です。

天印星は後継ぎには向かない

↓

家業の跡継ぎ

養子にいくのには向いていますが、自分の家の後継ぎには向きません。
これは実家の後継ぎです。
実家の跡継ぎに向いている星は、あとで出てきます。
そこで説明します。

参考・後継ぎ〔ただ後を継ぐのであれば後継ぎ〕順番として長男が父の後を継ぐ。

参考・跡継ぎ〔なにかが存在していて、その地位を継ぐ〕浩宮様は天皇家の跡継ぎ。

☞ 養子の星の話は、すこし難しいところもありますので宿命をつかって説明します。

✽ 美智子皇后

1934(s9)-10-20

	貫索星	天印星
玉堂星	調舒星	調舒星
天恍星	貫索星	天印星

✽ エリザベス女王

1926-4-21

	車騎星	天馳星
龍高星	龍高星	禄存星
天印星	鳳閣星	天印星

お二人を並べましたのは、お二人とも天印星が２つあります。

天印星は宿命に１つあっても、養子的というのは当(あ)て嵌(は)まりますが、２つあればその質が余計に強くでます。

☞ エリザベス女王は長女に生まれて、男兄弟はいないので、自分が英国王室を継いで、女王の地位につきました。『天印星は後継ぎに向かない星です』と、いっているわけですが、ここの部分が少し複雑な箇所なのです。

天印星は養子の星ですが、女性が天印星をもっている場合は、条件つきで婿養子をもらうことは可能です。

エリザベス女王のように、女兄弟しかいなくて、しかも長女です。彼女のように婿養子をもらわなくてはならない立場になった場合、女性は婿養子をもらうことができます。それで天印星を消化（しょうか）できるのです。

天印星を消化〔天印星のもつ意味合いを自分の身についてものとする）

星の消化（星の意味を完全に理解して、身についたものとする）

女性の天印星は婿養子をもらうことは可能

↓

条件 ⇒ その婿に後継ぎになってもらうこと

女性の天印星は婿養子をもらうことはできますが、その婿さんに後継（あとつ）ぎになってもらうという条件があります。
入（い）り婿（むこ）は女性からみれば夫です。夫に後継ぎになってもらうのです。それが条件です。
なぜかといえば、天印星は後継ぎに向かない星ですが、英国王室のように、女性が親の跡（あと）を継（つ）がなければならない場合は、お婿さんをむかえて、その入り婿に跡継（あとつ）ぎの役目を果たしてもらうことが重要な条件になります。

☞ ふつうの民間の話であれば……。

〔たとえば〕天印星をもつ女性の親が会社を経営しています。娘しかいないので、お婿(むこ)さんをもらいたいということであれば、婿養子をもらって、そのお婿さん二代目の社長になってもらえばよいのです、

イギリス王室は、そういうわけにはいかないのです。

英国王室には決まりがあります。

〔エリザベスに夫として迎えた婿養子には、位継承権はないので、女性のエリザベスが王位を継承(けいしょう)するしかないのです〕

しかし、算命学は〔王室の決まりは関係ない〕のです。

〔算命学の法則に適応していなければ、その家系は衰(おとろ)えていくようになります〕そういう占いになるのです。

エリザベス女王は、算命学の条件に則(そく)していませんから、家運が衰えるという出方になります。

この場合は家運が衰える

家運が衰える――さまざまな出方があります。

天印星をもっているのが男性だとすれば、家運が衰えるというのは、家業が衰えると考えてよいのです。

参考・継承（けいしょう）〔地位や身分、財産、権利、義務などを、ひきつづいて、うけつぐこと〕

参考・適応〔ある条件や要求などにあてはまること〕

参考・則（そく）する〔ある事柄を基としてそれに従う〕

☞ 家運が衰えるということについて……。

主人公を女性として考えますと〔女性は子供を産んで、子供を家系に合う人物に育てるという役目があります。こういう意味合いが女性の場合はふくまれます。

それゆえに、天印星をもつ女性の場合は、端的にいえば、子供の育ちが悪くなります。

女性の場合は子供の育ちが悪くなる

↓

子孫の育ちが悪くなる

もっと大きな意味で、子孫の育ちが悪くなります。

このことについては、もともと男の役目と女の役目にはちがいがあると算命学では考えていまして、皇族だからとか、法律ではこうだとか、男女平等だとか、そういう話とは別です。

〔たとえば〕天印星の女性が後(あと)を継(つ)いだとき、子供が１人も生まれなかったら、その家系は途絶えることになります。後継ぎが絶えてしまったのであれば、それは家運が衰えたことになります。
あるいは、後継ぎは生まれましたけど、その子供が家系を乱すような生き方になってしまうのであれば、それも家運が衰えたことになります。
〔男の役目〕と〔女の役目〕はちがっていまして、女性の場合には“子供の育ち”にでてくるのです。

“子供の育ち”ということでいえば……英国王室の場合エリザベス女王の子供は、みんな離婚しています。
王室の継嗣(けいし)（跡継ぎ）であるチャールズ皇太子もダイアナささんと離婚しています。
アン王女も離婚して、アンドリュー王子もセーラー妃と離婚しています。
皇族でありながら、不倫、離婚、そのような人たちばかりです。
端的（率直）にいえば、エリザベス女王に問題があります。
この事象を算命学で考えると、母親の育て方が悪かった

といえます。
さらになぜ――跡継ぎに向かない宿命の子供が生まれてしまうのかといえば、それは……そのまた上の代の責任なのです。

補足しますと、エリザベス女王の夫であるエディンバラ公には養子運がないのです。
『養子運のない夫』を養子にもらってしまえば、よけいに子供の育ちが悪くなるといえます。

そういう意味では、ダイアナ妃もこの家系に嫁いだということでは犠牲者の１人といえます。
家系の子供運が悪い犠牲の部分を引き受けたといえます。
しかし、ダイアナ妃はそれだけではなくて、彼女が〔6 歳〕のときに、母親が家をでたことも、ダイアナ妃の人生にとても大きな影響を与えています。
また、彼女個人の問題として、ダイアナ妃の宿命も関係しています。

✽ 美智子皇后　1934(s9)-10-20

	甲	甲	甲		貫索星	天印星	14 壬申
戌	子	戌	戌	玉堂星	調舒星	調舒星	24 辛未
亥		辛	辛	天恍星	貫索星	天印星	34 庚午
		丁	丁				44 己巳
	癸	戌	戌				54 戊辰
							64 丁卯
							74 丙寅
							84 乙丑

4 癸酉

✽ エリザベス女王　1926-4-21

	庚	壬	丙		車騎星	天馳星	16 庚寅
申	辰	辰	寅	龍高星	龍高星	禄存星	26 己丑
酉	乙	乙	戊	天印星	鳳閣星	天印星	36 戊子
	癸	癸	丙				46 丁亥
	戊	戊	甲				56 丙戌
							66 乙酉
							76 甲申
							86 癸未
							96 壬午

6 辛卯

✽ エディンバラ侯爵　1921-6-10　1921-4-9〔99 歳没〕

	甲	甲	辛		牽牛星	天報星	2 癸巳
寅	辰	午	酉	石門星	司禄星	牽牛星	12 壬辰
卯	乙			天堂星	貫索星	天極星	22 辛卯
	癸	己					32 庚寅
	戊	丁	辛				42 己丑
							52 戊子
							62 丁亥
							72 丙戌
							82 乙酉

天印星はありません

✽ ダイアナ妃　1961-7-1　1997-8-31〔35 歳没〕

	乙	甲	辛		車騎星	天馳星	2 乙未
辰	未	午	丑	禄存星	龍高星	禄存星	12 丙申
巳	丁		癸	天貴星	石門星	天印星	22 丁酉
	乙	己	辛				32 戊戌
	己	丁	己				42 己亥
							52 庚子

☞ 美智子様もエリザベス女王も天印星が２つあります。『養子』『養子運』ということで話を進めてきましたが、天印星をもっている女性がお嫁に行った場合はどうなるのでしょう……？

天印星をもつ女性がお嫁にいくと、その家の人になりきれます。

天印星をもつ人が養子に行けば、よい養子になれるわけです。養子先ですっかりその家の人になれば、よき養子といえます。

しかし、いつまで経(た)っても養子先になじめなくて、その家の人物になりきれない人は、いい養子とはいえません。

このことは、お嫁さんの場合もおなじです。

男性の入(い)り婿(むこ)を“婿養子(むこようし)”といいます。

女性が嫁いでも“嫁養子(よめようし)”とはいいません。でも理屈はおなじです。

つまり、天印星をもつ女性がお嫁にいけば、嫁(か)した家の人物になりきれます。すっかりその家の人物になれます。

天印星をもつ女性が、皇族に嫁いだ場合は、皇族として恥ずかしくない人物になりきれます。

美智子様の陰占宿命は〔平民から貴族になれる〕という

特別な宿命に準じているのです。
その特別な条件を加えますと、皇族としての人物をくらべたときに、美智子様はよりいっそう皇族としての人物になりきれるのです。美智子様は皇族としての雰囲気を醸(かも)しだしていたといえるでしょう。

〔たとえば〕の話として……美智子様が料亭に嫁(か)したのであれば、料亭の女将になりきれるということです。
天印星にはこのような意味合いがあり、そういう質をもつ星ですから、〔養子にいくと〕または〔お嫁にいくと〕その家の人物になりきれます。
実(じつ)の両親をおぼえていない赤ん坊の時代の星ですから、どのような親のところ、どのような家に行ってもなじめるわけです。

女性の場合でいえば、お嫁に行けば、その家の人物になりきれますから、嫁いだ家にふさわしいお嫁さんになれます。
ということは……長男のところへお嫁に行ったほうがよいのです。

長男のところに嫁いだほうがよい

↓

その家の中心的存在になれる

なぜなのかといえば……親とまったく関係のない生き方をしているような、次男とか三男に嫁いでも、天印星のよさを発揮できません。
長男のところへ嫁いだ場合は、まるでその家の娘のように、嫁いだ家の中心的な存在になっていきます。
天印星の特徴のひとつです。

〔たとえば〕自分がその家の長男で、自分が後(あと)を継(つ)ごうとおもうのであれば、天印星をもっているお嫁さんを迎えるとよいですね。そのお嫁さんが、家のために一生懸命やってくれます。結果的に中心的存在になります。
しかし、お嫁さんが家の中心的立場になってしまうと、夫のほうが婿養子みたいは状態におかれてしまうということが起こります。
美智子様はつねに平成天皇に寄り添うようにしておられましたが、皆さまはいかに想われましたでしょうか……。

天印星をもつ美智子様は実家を継いでいません。

天皇家へ嫁ぎました。

子供の育ちは悪くない

美智子様のような生き方であれば、子供の育ちは悪くないのです。

エリザベス女王のような生き方をしてしまうと、子供の育ちが悪くなります。

このように考えていただきたいのです。

✏ 天貴星（てんきせい）です。

天貴星 ― 児童〔３歳～小学生くらいまで〕

天貴星は児童の星です。
目安としては〔３歳〕くらいから、小学生くらいまでの子供をいいます。

天印星〔赤ん坊の時代〕と 天貴星〔児童の時代〕の違いはなにかといえば、『物心（ものごころ）』がついたのか、ついていないのかです。だいたい３歳くらいになれば、子供の物心はつきます。
おそらく皆さまも、生まれてから０歳、１歳、２歳くらいまでの出来事は記憶にないでしょう。
それは物心がついていないからです。
２歳半くらいから物心がつく早い子供もいるかも知れません。個人差は別にしまして、物心がついていないということは、この世に生まれて来たのですが、人間としての精神がまだ完成されていない時代です。
母体から産（う）まれるときに、すでに肉体は完成していて、

母親の胎内から送り出されますが、赤ん坊の精神は未完成の状態であり、生(う)まれてから３年くらいで精神が完成して、幼心(おさなごころ)がつき始めると、算命学は考えています。

地球上に生命(いのち)をうけて、３年くらいで精神は完成する

参考・物心〔人の気持ち、人間関係などがわかりはじめる〕

参考・幼心〔まだ判断力・理解力が十分ではない、子供のこころ〕

☞「天(てん) 地(ち) 人(じん)」という言葉があります。
『気(き)』では、天気(てんき)・地気(ちき)・人気(じんき) といいます。

天気 ― １年
地気 ― １年
人気 ― １年
生まれて３年で「天 地 人」の『気』がそなわる。

生まれてきて、最初の１年で『天気』がそなわります。
つぎの１年で『地気」がそなわります。
つぎの１年で『人気』がそなわります。
生まれて３年で「天 地 人」の３気がそなわります。

生まれてから３年で「天地人」の『気』が、子供になかにしっかり入ります。そのおかげで３歳になると誰でも物心がつくと考えているのです。

そして……

木気（もっき）
火気（かき）
土気（どき）
金気（きんき）
水気（すいき）

〔五行の気〕
生まれて５年で五行の気が
そなわる

五行〔木火土金水（もっかどごんすい）〕の気をそれぞれ**〔木気〕〔火気〕〔土木〕〔金気〕〔水気〕**といいます。

これらの五気（ごき）も１年毎（１ねんごと）に、１つずつ子供にそなわっていきますから、生まれて５年で〔五行の気〕がすべて人体に整（ととの）うと考えているのです。

さらに……

五行の気**〔木気〕〔火気〕〔土木〕〔金気〕〔水気〕**のほかに、

陽気（ようき）（太陽の気）
陰気（いんき）（月の気）

陽気と陰気という陰陽の気を加えます。

五行の気〔**木気**〕〔**火気**〕〔**土木**〕〔**金気**〕〔**水気**〕のほかに、
陽気（**太陽の気**）と **陰気**（**月の気**）がそなわるのです。

〔木気〕〔火気〕〔土木〕〔金気〕〔水気〕

五行の気〔木気〕〔火気〕〔土木〕〔金気〕〔水気〕
陽気（太陽）
陰気（月）

生まれて７年で七曜の気が人間にそなわる。

五行のほかに、陽気と陰気がそなわるには、７年かかります。
七曜といい、七五三の原理になっているのです。

生まれて３年 ― 天地人の気がそなわります。
生まれて５年 ― 五行の気がそなわります。
生まれて３年 ― 七曜の気がそなわります。

☞ 昔の中国では、子供が産まれて３歳になると、七五三の最初のお節句を行ったのです。
それは天地人の気が、その子にそなわったというお祝いです。
５歳になると、五歳のお節句を行いまして、五行の気が

そなわったというお祝いです。

７歳になると、七曜の気がそなわったというお祝いをしました。

７歳までくれば、自然界のすべての気がそなわり、この子は成人するまで、生きていけるというふうに考えて、

７歳のときに正式な名前を、その子に与えたそうです。

それまでは愛称で呼んでいて、７歳のときにきちんとした名前をつけてあげたわけです。

当時は、新生児が亡くなる確立が、現在（いま）よりもはるかに高くて、小さい子供が病気をしてすぐ死ぬ、ということはよくあったそうです。日本もおなじでした。

７歳まで成長すればよほどのことが起きない限り、成人するまで生きていけるという意味をこめて、７歳になると、最後のお祝いをしたのです。

いつの頃か不明ですが、この風習（ふうしゅう）が日本に伝わり、日本では、女の子は３歳と７歳、男の子は５歳だけです。

昔の中国では、男女に関係なく、３歳、５歳、７歳に祝ったそうです。この話は男女の性別に関係ありませんので、男の子でも女の子でも、お祝いを行って構わないのです。

➾ 話はもどります……。

天貴星のひとつ前の時代は赤ん坊の時代でした。
赤ん坊は無心で無欲、天真爛漫で意識して行動しているのではなくて、無意識のうちにさまざまな行動を起こします。それは赤ん坊の時代の良さであり特徴でした。

天貴星はだいたい七五三を迎(むか)えるくらいの子供の時代です。３歳くらいから小学生までの子供の時代を想像するとよいでしょう。

昔は……生まれて３年くらい経過すると、天地人の気がそなわって、人間としての精神も完成して、物心がつく時代と考えていました。

天貴星 ⇒ 物心(ものごころ)がつく時代

天貴星の時代になると、はっきり人間しての精神が確立して、自意識が芽生えます。

自意識が芽生える

参考・自意識〔自分がどうおもわれているか、気にする状態〕

赤ちゃんの時代と違って、天貴星の年齢になると、自分の意識がそなわり、自分の意見を言うようになります。
「わたしはこうしたい……」というようにもなりますし、「こうじゃなきゃイヤ……」と駄々(だだ)を捏(こ)ねたりすることもありますし、「バカ」とか、「おまえなんかきらいだ」とか、大人にむかって悪口をいったりする子供も出てくるようになります。
そのような自意識がそなわってきたわけです。
その自意識のなかでも、特筆すべきなのは『自尊心』だと算命学では考えています。

自尊心

赤ん坊のときは無邪気・無心であったのが……物心がついて、まわりから自分がどのようにおもわれているのかを意識して行動するようになったということだけではなくて、天貴星は自尊心をそなえるようになります。

参考・自尊心〔自分の尊厳を主張して、他人の干渉を受けないで、品位をたもとうとする心理・態度。プライド〕

天印星のころの記憶は残っていません。
天貴星の物心がついた時代になると記憶は残ります。
その違いだけではなくて、さらに重要な違いは、自尊心だと考えているのです。

端的にいえば、赤ん坊は恥ずかしいとかの感情はまったくないわけです。つまり自尊心はないのです。
天貴星の物心がつく年齢になると、はっきりと自尊心がそなわります。
「この年代は純粋であるがゆえに、一生のなかでもっとも自尊心が強い」と、算命学は考えているのです。
大人の自尊心よりも、このころの子供の自尊心のほうが、強いのです。言い換えれば、天貴星はプライドの高い星なのです。

天貴星は自尊心をそなえる時代

↓

プライドの高い星

子供だからプライドは低(ひく)いとおもったら大間違いです。
天貴星のプライドのほうが、大人よりも高いのです。

〔たとえば〕この頃の生徒の感覚とは、かなりの相違がありますが……小学生のころ、遅刻して、授業をやっている最中に後ろ(うし)から教室に入って行く、その状況はかなり恥ずかしいという思いがあったわけです。
あるいは、先生に怒られて、廊下に立たされていると、恥ずかしさがありました。(……筆者の時代には)
現在(いま)は立たされるようなことはないでしょう……？
むしろ、生徒が文句をいうかもしれませんね。

最近――幼児虐待・児童虐待の報道があります。
天貴星の時代に親から虐待されたとか、自尊心をひどく傷つけられたらどうでしょう……。
〔たとえば〕４歳の子供をはだかにして、外へだして、一晩中置きっぱなし……４歳で覚えていないから大丈夫だと、思ったとすれば大変な間違いです。

４歳くらいの子供を、折檻(せっかん)だとかで、一晩中はだかにして外へ出したら、一生その子の心に傷が残ります。
この時代は強烈な傷跡が残ってしまうのです。
その心の傷が犯罪へつながっていくこともあるのです。

✽ 加藤智大（ともひろ）　1982-9-28　秋葉原無差別殺人・犯行事〔25 歳〕

	甲	己	壬		龍高星	天印星	4 庚戌
子	寅	酉	戌	貫索星	牽牛星	禄存星	14 辛亥
丑	戌		辛	天禄星	司禄星	天報星	24 壬子
	丙		丁				34 癸丑
	甲	辛	戌			車騎星の大運	44 甲寅
							54 乙卯

加藤智大は５歳の頃、３歳の弟の手を引いて３～４キロある祖母のところへ家出したことがある。母親と父親にひどく怒られて、「出ていけ」といわれたらしいのです。

彼は天貴星の時代にこのようなことがたびたび遭（あ）ったようです。

彼の主星は〔牽牛星〕でプライドの星です。

４歳からの大運でも、車騎星（プライドの星）がまわっています。

〔牽牛星〕〔車騎星〕ということを鑑（かんが）みても、彼のこころは回復できないほどに切り裂かれて傷ついたのでしょう。

ここでは説明しませんが、彼が無差別殺人を犯した原因は両親にあるといえます。

天貴星は自尊心が強く、責任感も強い星です。

責任感が強い

小学校・低学年のときに、宿題をだされたら、なんとかそれをやらなくてはいけないと思ったはずです。
中学生くらいになると、わざと宿題をやらないとか……担任に反抗して学校に行かないとか、そのようなこともあるでしょうが、天貴星の時代は、そういうことはないのです。
まったくないとは言い切れませんが、与えられた責任を果たさなくてはいけないと自覚して一生懸命やろうとします。そういう星ですから、責任感がとても強いです。
「やらなければ、自分の自尊心にかかわる」と意識するわけです。

責任感が強いという質が、家系のなかにおいて発揮されますと、長男としての役目意識となります。

家系においては、長男としての役目意識となる

↓

長男の星・後継ぎの星ともいわれる

天印星は後継ぎに向かないという意味がありましたが、
天貴星は後継ぎに向いている星です。
もしも、天印星と天貴星の両方をもっているとすれば、
〔長男に生まれたのか〕〔次男に生まれたのか〕〔女の子に生まれたのか〕それによって意味合いが変わります。

天貴星には後継ぎの星・長男の星という意味があります。
もう少し後(あと)にでてきますが、〔天庫星(てんこせい)〕という星があります。天庫星は“長男の星”という意味が最も強い星です。

天庫星（長男の星）

天貴星（後継ぎの星・長男の星）

✍ 私たちは〔天庫星(てんこせい)〕を〔てんくらせい〕というふうに呼んでいます。
なぜかといえば、天胡星（てんこせい）という星がありますので、それと区別するためです。その天胡星も（てんゆめせい）と呼びます。
呼び方を変えることで、即座に星が区別できるようにしているのです。
星を間違えると、占いの答えが変わってしまいます。
書けば違いは判りますが、言葉で伝える場合は、〔天庫星 てんくらせい〕〔天胡星 てんゆめせい〕と区別しています。

☞〔長男の星〕と〔後継ぎの星〕の観方(みかた)につきましては、天庫星(てんこせい)（てんくらせい）の箇所でまとめて説明します。
つまり〔長男の星をもっている人物が、次男に生まれたらどうすればよいのか〕〔女の子が長男の星をもっていた場合はどうなるのか〕というふうに、それぞれの状況にわけて、説明をする必要があります。

このような事柄をまとめて、天庫星（てんくらせい）のところで、ご説明します。それまでお待ちください。

☞ 天貴星の時代は、ほかのどの時代の星よりも優れている質があります。ほかのどの時代の星よりも勝っているのは、“知識を吸収するチカラ”記憶力です。

一生のなかで、記憶力が最も優れているのはこの時代です。

「若い人は記憶力がいいね」とか「歳をとると記憶力が落ちてくる」とかいいますが、若い人よりも、子供のほうが記憶力はすぐれています。
〔たとえば〕あのころは〇〇ちゃんと遊んでいたとか、ふざけていたら親に叱(しか)られたとか、先生に怒られたとか、この時代些細(ささい)なことでも覚えているはずです。

しかし、大人になると〔昨日はなにをしていたのか……〕〔さっきはなに食べたっけぇ……〕と、思い出せないようなことがあったりして、記憶力はだんだん衰えてくるはずです。

児童の時代は覚えようと意識しなくても、頭にしぜんと入ってきちゃう。そのように記憶力がよい時代です。
天貴星は「知識欲」があると同時に「記憶力」の星です。

好奇心(こうきしん)がつよく、知識欲旺盛(ちしきよくおうせい)で記憶力がよい

好奇心・知識欲が盛(さか)んで記憶力もよいのです。
この年頃の子供は「わからない事柄があると」すぐに、〔どうして……〕とか〔なんで……〕とか言いかけてきて、大人に訊(き)きたがりますよね。
それくらい知識欲に満(み)ちあふれています。
この時代に学び取ったものは、ほとんどの場合、記憶に残ります
このことは天貴星がほかのどの時代の星よりも、すぐれている資質です。

端的(たんてき)にいえば「天貴星は記憶力のよい星」です。
しかし、記憶力はつかっていないと鈍化(どんか)します。
このことは、前にも「考え方」として出てきました。
腕(うで)と脚(あし)を比較すると、脚のほうが何倍も筋力が強いですから、脚のほうを重点的につかわないと、身体がバランスを保持できなくなります。
それゆえに〔毎日何キロ歩いたほうがよい〕という話にもなってくるわけです。
足・脚をつかわないで、朝から晩まで坐(すわ)りっぱなしで、作業の仕事を続けていたら、体調が崩(くず)れてくるはずです。
「脚のほうが強いのだから、脚をつかいなさい」というのとおなじで、記憶力がつよいのだから、記憶力をつかうとよいのです。
記憶力がよい星なのだから、つねになにか勉強したりして、頭を活動させ、知識の習得をしなさい。という意味で天貴星に与えられているのです。
それなのに、頭をつかわないでいると、記憶力がふつうの人よりも鈍ってしまうのです。

参考・端的〔てっとりばやく要点をとらえる〕

参考・鈍化〔にぶってくる〕

頭をつかって、つねに知識の習得を心がけるのです。

それは勉強という形でなくても構いません。
「なにか趣味をやっている」でもよいのです。
映画が大好きなので、毎日なにかしら映画を観て、さまざまな知識を蓄(たくわ)えています。それでもよいのです。

天貴星は知識欲が旺盛で、記憶力もよいです。それを活(い)かさなければ、宿命から外(はず)れてしまうことになります。
「頭がよい人ほど、頭をつかわなければいけません」というふうに考えてください。

記憶力のよい資質をつかわないで生きて行けば、役目を果たしていないのとおなじです。
天貴星をもつ人物はどのような道へ進んでも、あるいは、どんな仕事に就(つ)いても、つねに頭脳を働かせて、知識の習得を心がけて生きることです。
それができれば、本人自身も満足できる人生になりますし、運勢も伸びていきます。
星を輝かせるには、その星をつかうことです。

このことができないと、人生も不満足で運勢も下がってしまうことになります。
少し具体的にいえば……せっかく与えられた星を活かすことなく、通り過ぎてしまうと、不平不満が多くなり、欠点ばかりを出すようにもなります。
星は腐(くさ)りますよ。

☞ どのような出方になるのかといえば……さきほど天貴星は自尊心の高い星ですよ。といいました。
頭をつかって、知識の習得を心がけないで過ごしてしまえば、さまざまな事柄やものの成り立ちを知らないわけです。
ところが、プライドだけは人一倍(ひといちばい)高くて、見栄を張って、知ったかぶりをするとか、嘘(うそ)を吐(つ)くとか、そのような出方になっていきます。

参考・人一倍〔ふつうの人以上であること〕

子供でもそういう欠点を出すときがあります。
「宿題やってこなかったの……」と訊くと、その子供にとっては〔やってこなかった〕とこたえれば、自分のプ

ライドが傷ついてしまうので「やったんだけど、家に忘れてきました」というわけです。
あるいは……みんながもっているのに、自分だけもっていないと思われるのは嫌だから、もっているふりをする。
子供にはそのようなところがあるでしょう。

それとおなじで……大人になっても、見栄を張るとか、知ったかぶりをするとか、悪くでると“嘘を吐く”などの欠点がでてしまうのです。

天貴星のもつ特質を発揮していないと、欠点がでるようになって、マイナス要因になるのです。
いつか嘘はばれてしまうでしょうし、知ったかぶりをしていたら、それもばれるときが来るでしょう。
そのことに起因して、まわりの信用を失って、嫌われて孤立するようにもなります。
人生そのものが“生きにくく”なっていきます。
その結果として、運気も不成功のほうへと傾いてしまうので、不満の多い人生になってしまいます。
そのようにならないためには、知識を蓄えるのです。

☞ 天貴星をもつ人は、年齢に関係なく、なにか知らない事柄があれば、他人(ひと)に教えてもらうとか、自分で調べて知識を身につけてください。

つねに、知識欲を旺盛(おうせい)に保つことで、人格的にも立派になってゆきます。

まわりからも認められて、運勢も伸びて行くのです。

【初年】４１回目〖十二大従星力学②〗 終わります

つぎの授業 ⇒【初年】４２回目〖十二大従星力学③〗です。